シーナの事情

イチル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
シーナの事情

【Ｎコード】
Ｎ４８７３Ｙ

【作者名】
イチル

【あらすじ】
レキルス王国の王都ガレストラにある本屋『サクラ』を営むのは、日本から能力を持って異世界トリップしてきた少女、田宮椎名。
これは本屋（でも裏では情報屋）な彼女とそれを取り巻く周りの人達の友情恋愛その他もろもろの事情。＊＊＊＊毎回２３時に更新します

1　彼女の事情

ガレストラは今日も賑わいをみせていた。
多くの歩行者よる騒音の中に売り子娘の少し高めの声が響き、人々は思い思いの店で互いに有益になるよう買い物をする。
ある人が興味なさげに視線を外したモノを、他の人が輝いた瞳で見つめたり。
大金を軽く払う人もいれば、お金が足りずに溜息をつく人もいる。
その顔は十人十色。

レキルス王国の主な産業は武器。
その王都であるこの街は、良い武器といえばガレストラ、と言われるほど有名で、それを扱う騎士たちの腕も大陸一だ。
そんな街だからもちろん殆どの店が武器屋。
そのかわり武器屋の競争率は激しいが、他の店の中には街に一軒しかない店などもあるので、そういった店は客を一人占めできるのだ。

そんな街に一軒しかない本屋『サクラ』を営んでいるのが、この私。
シーナ・ターミャ、もとい田宮（たみや）　椎奈（しいな）。
3年前、15歳のときに日本から異世界トリップしてきた本好きの少女だ。
この店は、その際に神様から貰ったもの。

本に関わる仕事につくのは小さい頃からの夢だった。
もともと私は知識欲が他人と比べて凄くあり、世界の全てを知りたいと常々思っていた。
まぁ、それは無理だとは分かってはいたが。

体が弱く生まれた頃から入院中だった事もあり、よく本を読んでいたら段々とその魅力にとりつかれてしまった。

そんな所を神様に気に入られて強制的に異世界トリップさせられた。
願いを3つ叶えてあげよう。
そう言われて、言った願いの1つ目が「本屋の店長になりたい」である。
どうやって叶えてくれるのかな～と思っていたら、トリップした先に助けたおじいさんが経営していた本屋を「もう自分は年だから」と言い、くれたのだ。
そのおじいさんは今、隣国にいる息子夫婦の元に住んでいる。

2つ目の願いは「身体能力の向上」。
理由は今まで外で遊んだ事があまりなかったため、向こうではめいっぱい楽しもうと思ったからだ。
あの神様はついでに魔力も最高にサービスしてくれた。
おもいきり楽しんでこい、と。
ちなみに隠しているが魔力量と質は世界で1番、剣技では宙に投げた玉ねぎのみじん切りを2秒でできるくらいだ。
チートやばい、そして便利。
おかげで今は異例の早さでギルドランクBだ。

3つ目は「その世界の全てが知りたい」。
国家の秘密から隣の家の晩御飯まで、全て。
そう言ったとき神様は満足気に微笑んで、一冊の本をくれた。
今、私の横においてある鈍色の本がそうだ。
表紙の絵も題名もない中身も白紙なこの本は、実はこの世界の知識の塊。

知りたいと思った情報だけを載せてくれる神様特製の本。

例えば私が「あの人誰だっけ」と思いながら本を開くと、その人物の名前と生年月日、家族構成や育ち方、周りからの評判まで書かれている。
プライバシー皆無もいいところ。

まぁ、こんな能力もあって実は私は本屋件情報屋だったりする。

1―2

カランコロン

「いらっしゃい、レオンさん。今日はどんな本をお探しですか？」

店の中に入ってきたのは少し波打ったサラサラの金髪に透きとおる海色の瞳の美青年。

それはまるで御伽話に出てくる王子様のような…っていうか王子様だ。

正真正銘この国の皇太子であるレディオン・リンド・フルノ・レキルス殿下。

先ほどの『レオン』という名前は偽名だ。

彼はたまに病弱な妹姫のために身分を隠して本を買いにきている。

勿論、私の情報本にかかれば素性などすぐ分かるので、身分を隠しても意味がない。

別に誰これ構わず個人情報を見ているわけではなく、最初にこの店に来たときに平民と言うわりにはやけに身なりがいいから気になったのだ。

「こんにちは、シーナ。今日も妹のために本を買いに来たのだけれど…」

「じゃあ、この本なんてどうですか？今流行ってる恋愛小説。私のオススメですよ」

私が近くの棚から取り出したのは桃色の本。

ノイズというこの本の作者は他国の間でも有名で、毎回ベタで甘い

ラブストーリーを書くので女性受けがいい。
そんな大物小説家の彼女は私の友人でもあるのだが、この話はまたの機会に。

レオンは本を手に取りパラパラと中を見る。
そして、最後まで見終わった後のこちらへ向ける視線はとても満足気だ。
それに対して私もニッコリと微笑むと、途端にレオンの顔が真っ赤になる。

何故に？
たまにこういった事があったのだが、理由が分からない。
そのたびに王様ってポーカーフェイスが大切なのではないのか、と彼の将来が少し心配になる。

そして、しばらくの間の沈黙。
2人ともが何を話そうか考えているときに、急に本屋のドアが勢いよく開いた。

「シーナいる？」

入ってきたのは茶色の髪をポニーテールにくくった女。
その手には朱色の宝石がついた銀色の杖。

彼女はアイリス・キュート。
Aランク冒険者の魔法使いの私の友人で、レオンの元クラスメイトでもある。
レオンが通っていた学校、となると一国の皇太子が通うような学校なのだが、彼女は実は孤児院出身だ。
魔力量の高さをかわれて無理矢理入学させられたらしい。

その卒業後には数多の勧誘を振り切って冒険者になり、今は各地を転々と巡っている。

彼女と出会ったのは私が暇つぶしにギルドで依頼を受けていたとき、討伐対象も倒してさぁ帰ろうというときに邪竜と戦っている彼女と出会った。
苦戦していたようなので手助けをしたのが切欠だった。

という話は閑話休題、またいつか。

「いらっしゃいませ、アイリス。今回はどんなものをお探しで？」

助かった、アイリス。
あの気まずい空気は苦手だ。
とりあえず、まだ顔がほんのりと赤いレオンは置いといて、アイリスの相手をしよう。
それにしてもレオンは美形だから頬を染めると乙女にしか見えない。

「ん？レオンはいいの？まぁいいや、この本の修理を頼める？」

そう言って渡されたのは特に壊れた様子もない普通の本。
これのどこに直さないといけない所があるかというと……そんなものは、ない。
だが私は困った顔もせず、逆にニヤリと笑った。

「分かりました。少々お待ちください」

そういうと、私はその本と傍らの鈍色の情報本を持って店の奥に入った。
さて、情報屋としての仕事がんばりますか。

1―3

『壊れた本を直してほしい』

それは私に情報屋としての仕事をしてほしい、という意味。

本の３３ページ目に欲しい情報とお金を挟んで私に渡す。
私はそれを受け取り、そのお金に対応する情報を書き本の２２ページ目にそれを挟み、客に渡す。

それが情報屋『サクラ』の利用方法である。

私はアイリスから受け取った本を開いた。
左下に３３と記されているページには、ルール通りに紙と紙幣があった。

今回の依頼内容は『ローズ・テファ・メルシスについて』。

ついにここまできたかぁ、と思う。
ローズ・テファ・メルシスというのはアイリスの生き別れの母親の事。

彼女の母親は隣国の侯爵家の末娘で平民の男と恋をしてアイリスができ駆け落ちをした。
しかし彼女の父親がそれを許さず、男を殺して末娘を連れて帰ったのだ。
母親は父親が来る事に気づき、父が来る前にアイリスを孤児院に預

けたのだ。
この事は神製の情報本で知ったのだが、多分彼女は孤児院の院長から聞いたのだろう。
取り出した紙に、もうここ3年で使い慣れた羽とインクを使って情報を書く。
本来なら個人情報、ましてや貴族の料金は高いのだが、アイリスは私の友人なのでサービスでいくつか情報を付け加えて、本に挟んだ。
店の方に出るとアイリスとレオンがなにかを喋っていたがすぐに止まり、アイリスは少し緊張した顔でこちらに顔を向ける。
あ、レオンの事を忘れていた。
「シーナ…見せてもらってもいい？」
「どうぞ」
本を渡す。
その表紙には『護身術の全て』と題名が書かれており、毎回この本を持ってくるのが彼女らしい。
受け取った本をパラリとめくり、２２ページ目を開く。
アイリスは内容を読み進めていき…泣きそうな顔になった。
「…相変わらず、仕事が早くて…助かるよ」
少し涙声になりながらアイリスは告げた。
そして、パタリと本を閉じて出入り口に向かう。

「ご利用ありがとうございます。次はお二人できてくださいね」
頭を下げた。
すると、アイリスは吃驚したように目を開いて、その後笑いながら言った。
「分かった、ありがと。…がんばれよ」
ん、何を？と思いながらも店を出て行ったアイリスを見送った。
また、店内に沈黙。
残されたのは私とレオン。
案の定、彼は一連の出来事の意味が分からず頭にハテナマークを浮かべてこちらを見ていた。
私はそれに曖昧に笑う。
「本、買っていきますか？」
そう言って、桃色の恋愛小説を取り出した。
最後に、その日『サクラ』でノイズの新作が一冊売れた事と、後日銀の杖を持った魔法使いがもう1人女性を連れて来店した事をここに言っておく。

閑話　１ー アイリスの視点（前書き）

第１話のアイリス視点のお話です。

閑話　１ーアイリスの視点

「シーナいる？」

私は扉が壊れるんじゃないかという勢いで店内に入った。
ミシリと音がしたので少し心配になったが、今はそんなことはどうでもいい。

『サクラ』の中にはシーナともう1人、
私の学友でこの国の皇太子でもあるレディオン・リンド・フルノ・レキルスがいた。
レディオンは驚いたように此方を見たが、シーナは安心したように私に話しかける。
っていうか何でレディオンは乙女みたいに頬を染めてんの？

「いらっしゃいませ、アイリス。今回はどんなものをお探しで？」

部屋にシーナの鈴のような声が響く。
レディオンは放置するらしい。

「ん？レオンはいいの？まぁいいや、この本の修理を頼める？」

渡したのはここを利用するときに使っている『護身術の全て』。
この本しか持っていないから仕方がないが。

「分かりました。少々お待ちください」

シーナは気のせいかニヤリと笑って2冊の本を持って店の奥に入った。

今回シーナに頼んだのはローズ・テファ・メルシスについての情報だ。
孤児院の院長から聞いたことだが、彼女は私の母親だという。
なんでも切羽詰まった顔でまだ生まれたばかりの私を預けに来たらしい。

「アイリスって本読むのか？」

隣に立つレディオンが聞いてくる。
あぁ、ここではレオンだっけ？
レディオンは彼女が情報屋である事を知らないので、皇太子だとバレている事も知らないのだ。
…こいつシーナの事好きなくせに何にも知らないな。

「友人に頼まれたんだよ」

「アイリスにそんな事頼む友人なんていたんだな」

「どういう意味」

「いや、別に」

レディオンの物言いに、少しイラっとする。

「ハッキリ言えよな」

「いいだろ、別に」

「そんなんだからシーナに振り向いて貰えないんだよ」

「な…っ！」

何故知っている、っていう顔をしている。
いや、バレバレだから。
見ている方が焦れったく、こちらとしては早々に彼らにはくっついてもらいたいのだが。
…そういえばシーナはこいつの事をどう思っているんだろう。
今度聞いてみるか。

ガチャ

レディオンが何か言いかけたとき、シーナが戻ってきた。

一瞬でレディオンの事を忘れ、シーナの方を見る。
手にある先程私が渡した本には、きっと情報が書かれた紙が挟まっている。
私の親の事が書かれた、紙が。

「シーナ…見せてもらってもいい？」

「どうぞ」

本を受け取ってめくる私の手は、情けない事に震えている。

そのページには、いろいろな事が書かれていた。

ローズ・テファ・メルシスの実家、家族、性格から駆け落ちした事、
夫が殺されて子供をキュート孤児院に預けた事。
そしてーーー1番最後に書かれている事を見て、泣きそうになった。

彼女は今も自分の子どもを探している。
貴方は望まれた子ですよ。

「…相変わらず、仕事が早くて…助かるよ」

シーナは知っていたのだろう。
私がその事を気にしていたのを。
孤児院にいる子は望まれない子が多いから。

「次はお二人できてくださいね」

そう言ったシーナの声に、私は勿論と思いながら返事をした。

閑話　過去の話（前書き）

またまたアイリス視点の閑話です。
今回は椎奈とアイリスの出会いのお話です。

閑話　過去の話

シーナは不思議な子だ。

彼女の経営する『サクラ』は本屋でもあり情報屋でもある。
私は本が苦手なのでそれは買わないが、情報屋はよく利用する。
『サクラ』は全く外れない情報屋として裏ではとても有名だ。

私がシーナと出会ったのは今から約3年前。
依頼でとある森に住みついた邪竜を退治しに行ったときの事だった。
今までに倒した事のある邪竜は上級魔法光魔法を放てば1発で倒せたので、今回もそれで大丈夫だと思っていた。
だが、その邪竜は他のものとは桁外れに強く、私が今まで戦ってきたのは邪竜の中でも下位のものにすぎないと気づいた。
どうやら私は自分は強さを自惚れていたらしい。

魔力切れで体が重くなり、どうしようかと悩んでいた頃、唐突に視界が光った。
そして鼓膜が破れるほどの爆音がなる。
同時に、反射的に目を瞑っていたため見えなかったが、微かに邪竜の苦しげな咆哮が聞こえた気がした。

音が鳴り止んで、恐る恐る目を開けると信じられない光景が瞳に映った。
先程まで私が苦戦していた邪竜がいた場所には、その跡形もない巨大な黒い炭の塊があった。

一瞬、思考が停止する。

「あ、大丈夫？」

視界の端にひょっこりと顔を出した少女が、私の顔を覗きこむ。
艶やかな黒髪に宝石のように輝く黒眼。
整った顔だちをして、どこか神秘的な雰囲気を出す美少女がそこにいた。

まさか、こんな少女が、邪竜を殺した？

「これは…あなたがやったの？」

「うん、勝手に参加しちゃってごめんね。倒してよかった？」

「いや…助かったけど」

信じられない。
見たところこの子はエルフでも魔族でもなさそうだし、多分…人間だ。
人間のまだ１０代前半くらいの子が邪竜、しかも中級以上の強さのそれに普通勝てるか？
答えは否、ありえない。

「怪我してるね」

そう言った途端に私の体が光り、傷が治っていく。
この子はあんな強力な魔法を使った後に、まだ魔法が使えるのか？
しかも無詠唱で？

「あなたは誰？」

「私は田宮…じゃなくて、シーナ・ターミャ。あなたは？」

「…アイリス・キュート」

この時の私は、まさかシーナが無二の親友になろうとは思っていなかった。

2　エリシアの病

今日はお店の定休日だ。

ついでに、この世界の時間について説明しておく。
1年は３６５日くらいで６ヶ月、１ヶ月は約６０日で、紫月、青月、緑月、黄月、橙月、赤月と並ぶ。
１週間は６日で、月の名前と同じように、紫の日、青の日、緑の日…となる。
１日２４時間、１時間６０分、１分６０秒というしくみ。
ほぼ地球と同じだ。

『サクラ』の定休日は毎月第一、第五の紫の日と青の日である。
今日は紫の日、つまり連続２日間の休暇の１日目。

する事は毎回決まっていて。
ギルドに行って依頼を受けまくる。
そして運動しまくる、これにつきる。

休暇なら休んだ方がいいのかもしれないが、普段の仕事でカウンターに座ってのんびりする事が多いので休暇くらいは動きたい。
そして前の世界ではできなかった事をしたいのだ。

―＊――――＊―

ギルド内に入ると騒がしかった室内が一瞬静まり返り、視線がこちらを向く。
だがそれも一瞬で、部屋はまた元の五月蝿さを取り戻す。
女性、ましてやまだ十代の子どもの冒険者は珍しいので仕方がないのかもしれないが、ジロジロと私を見るのはやめてほしい。
そう思いながら受付まで歩いていく。

「あら、シーナじゃないの。久しぶりね」

向かった先にいるのは薄緑色の長髪をゆったりと三つ編みにした優しげな女性。
私の馴染みのギルド受付嬢であるネリーだ。
年齢は２５歳で夫と子どもがいる立派な母親なのだが、子どもが学校に通い始めて時間が空いのでギルドマスターである祖父に頼んで受付嬢をしているという、少し変わった人。
たまに夫との惚気話や親バカな発言をしなければ、仕事のできる美人さんである。

「ネリーさん、何かいい依頼ありますか」

「そうねぇ…あ、これなんてどうかしら。新作ケーキの試食、条件は十代の女性」

ペラリと私の前に差し出した紙の依頼者の欄には王宮御用達と呼ばれる超有名菓子店『パティス』の文字。
ちょっと…いや、かなり気になるが今回はやめておく。
とにかく今は運動したい、遊びたい。

…いや、べつに体重が気になるとかじゃなくて。

「…できれば討伐系でお願いします」

「あら、もったいない」

彼女は紙をファイルにしまうと、別の灰色のファイルから似たような紙を取り出した。
確かそのファイルは極秘の依頼とかが入っていたはずだ。
私に見せたそれには、とんでもない事が書いてあった。

脱走を手伝ってください
依頼主：エリシア・リンド・リア・レキルス
報酬：お互い話し合って決めます
内容：みんなが過保護なので城の外に出れません。城下に行ってみたいので、その為の脱走を手伝ってください。

…この依頼主って、もしかして第一王女のエリシア姫ですか？

2―2

あ、この依頼内容を見た時点で、断る事はできないから。

ネリーにそう言われて泣く泣く受けたこの依頼。
第一王女の城脱走のお手伝いは、一歩間違えれば王女誘拐事件の犯人となるほど危険な仕事だ。
信頼できる人にしか任せられないため困っていたらしいが、信頼されている事に喜べばいいのか、それとも面倒な依頼を押しつけられた事を悲しめばいいのか。

あと、これがバレたらレオンにどんな顔して会えばいいのか…。

「はぁ」

鈍色の情報本を見ながら溜息をつく。
今見ているのは勿論エリシア姫の事。
犯罪者にならないためにも彼女の事は知っておかなければいけない。

エリシア・リンド・リア・レキルス
レキルス王国第一王女
金髪に緑の瞳をもつ１０歳
幼い頃からクリエッタ病にかかっており、周囲の過保護により城をでた事がない

クリエッタ病ってなに？
思うと反対側のページに情報が出てくる。

※以下の事は創造主にしか知られていない

クリエッタ病
体内の魔力の器が大きすぎるものが神竜の涙を飲むとかかる事がある
通常なら外に逃がす力まで受け止めようとするため身体が脆くなる
が、死ぬ事はない
患者は常に体の何処かに痛みを感じる
コリの果汁を聖水で薄めた薬を飲むと治る

この情報は神様しか知らない情報だったらしい。
どうりで皆が「王女は原因不明の病にかかっている」と言っている
わけだ。
神竜の涙なんてそうそう飲めるものじゃないし、その力を全て受け
止めるほどの魔力量なんて世界に数人しかいないだろうから、当た
り前だな。
今まで発病した人がいなかったのだろう。

しかし、コリの果汁か。
あの果実には確か食べた人の魔力の一部を体外に放つ効果があった
はず、その効果を聖水で強めて身体に染み込ませるのか。
なるほど、普段は毒薬扱いされているから誰も飲ませなかったのだ
な。

パタン、と本を閉じて傍らに置く。
依頼を受け（させられ）たのが朝の早い時間だったので、今は午前9時ごろである。
窓の外ではいつもの半分くらいの人が歩いている。

「どうやって迎えに行こっかなぁ…」

依頼によるとエリシア姫は昼食を食べ終えた昼の1時に私の部屋に忍び込んで迎えに来てほしいらしい。
王城に忍び込むことの難しさを彼女は絶対に分かっていないだろう。
ギルドの者かどうかは、私の胸元にある受付で渡された銀のペンダントで確かめる。
その後城下に脱走、いろいろ買い物をしたりして夕方6時の夕食までに城に帰るらしい。
もしも誰かにバレた場合は、王女がギルドの依頼書を見せてきちんと説明するそうだ。

すごい計画だ、普通のお姫様が考えるとは思えない。

「とりあえず、まだ時間があるから薬でも買いに行こう」

実は、コリの果汁も聖水もそこらの店で買えるような物だったりする。

2―3

目の前に立ちはだかるのはこの国の中心である立派な王城。
私は今からここに侵入するところだ。

方法は簡単。
まず光魔法で透明になり、体の表面に魔力を纏って城の周りを覆うバリアを通過。
そのまま風魔法で王女の部屋まで飛んでいく。
危険そうに見えるが、魔力量と質が世界一の私に不可能などない。

―＊――――＊―

というわけで、無事に到着。
バルコニーに降りると、窓から部屋の中の様子を伺う。
部屋にいるのはベッドに腰掛けて周りをキョロキョロとみている少女。
彼女がエリシア姫なのだろう。
情報通りの腰まであるさらさらの金髪にエメラルドの瞳の美少女だ。
部屋の周りを探ると何人か護衛の方が隠れてたので、彼等には王女が寝ている幻覚を見せる魔法をかけた。

そして、自分の光魔法を解いて窓をノックする。

コンコン

エリシア姫は吃驚したようにこちらを振り向き私の胸のペンダントを見ると、キラキラした目をしてバルコニーに近づいた。
そして口パクで訴える。
ちょっとまってて、と。
彼女はそのまま隣の部屋へ入っていった。

しばらくすると王女が現れた。
王族が着ることはないような庶民の服装で。

少し驚いている私を気にせず、彼女はバルコニーの窓を開けて勢いよく私に飛びついてきた。

「依頼を受けてくれてありがとう！ねえ、早く行きましょう！」

私に顔を向けるエリシア姫の頬は紅色に染まり、すごく可愛い。
その笑顔につられるように私も微笑み、王女の手を取る。

「しっかり掴まっていて」

少女が頷いた瞬間、周りの風景が王城の一室から見慣れた室内に変わる。
足元には淡い光を放つ魔方陣。
エリシア姫は一瞬で場所が移動した事に驚いて、目を見開いて周りを見る。

「ここは私の家だから安心して。少し話し合いをしましょう」

そう言ってソファに座るように受けて促した。

「私の事はシーナと呼んでね、エリシア様」

微笑みながらエリシア姫の前にオレンジ色のジュースを置く。
彼女はそれを恐る恐る口に運んで飲んだ後、美味しい、と呟いた。
ありがとう、それは私が作ったジュースなの。

「エリシアでいいわ。そんな呼び方をしたら街で目立ってしまう」

「分かった。じゃあエリシア、あなたは何色が好き？」

いきなりの質問の意味が分からない様子だったが、彼女は不思議そうな顔で「ピンク」と答えた。
すると、彼女の髪がピンク色に染まった。

「えっ！？すごい！」

「魔法で髪と瞳をピンク色にしたのよ。帰るときには戻してあげるから」

「うん！」

笑うエリシアはまさに天使とした言いようがないほど可愛いくて、
レオンがわざわざ城下に来てまで本を買う理由がよく分かった。
こんなに可愛い妹のためなら、何でもしてあげたくなるはずだわ。

2―4

「シーナ！これほしい！」

城下町に行ったエリシアは、それはもうはしゃぎまくった。

あれはなに？
これは？
かわいい！
ほしい！
おいしそう！

途中で、あれ？この子病気じゃなかったっけ？と何度も思った。
それを感じさせないくらい彼女は騒いで、その顔は幸せそうだ。

今回エリシアが指さしたのは銀のしおり。
色の銀ではなく、材料が銀のしおりだ。
それには丁寧な装飾が施されており、上品な感じになっている。
右下には猫のシルエットがあり、猫の目の部分には緑色の小粒の宝石がはめられている。

「エリシアと同じ目の色ね。私が買ってあげる。お姉さん、これください」

女性の店員さんにお金を渡して商品を受け取ると、それをエリシアに渡す。
彼女は今まで食べ物を買ってもそれ以外は買わなかった。
持って帰ると家族や侍女に怪しまれるからだ。
だが、このくらいなら構わないだろう。

「あ、ありがとう…！」

エリシアはうっとりとしおりを見つめる。
買ってあげて良かった、と思っていると、ふとエリシアが眉根を寄せる。

「エリシア、大丈夫？」

急にしゃがみ込んだ彼女が心配で、背中に手を当てる。
そして、彼女の体が熱くなっている事と、魔力が漏れ出ている事に気がついた。
まさか、クリエッタ病の発作？

「…っ…！…げほっ」

吐血。
エリシアの顔は真っ青で、それとは対照的に口にあてた彼女の手は真っ赤で。
本当は、この依頼は受けるべきではなかったのではないかと、凄く後悔した。

焦った私はエリシアを連れて急いで家に転移。
机の上に置いたままにしていた透明な液体の入ったビンを掴み、エリシアに渡した。

「エリシア！これ飲んで！」

言った瞬間、エリシアはビンをひったくるように奪い、口に流しこんだ。

口から零れた液体が、血と混ざりピンク色になって顎をつたう。

「う、ぁあ、あ〝あ〝あ〝あぁぁあ〝！！！」

彼女の喉がゴクリと鳴った途端、叫びだしたエリシアから膨大な魔力が溢れだした。

チートな私でも冷や汗を垂らして近づく事さえできないくらい大量な、濃い魔力。

多分、これはエリシアが今まで受け止めきれなかった神竜の涙の魔力だ。

先程エリシアに飲ませたのはコリの果汁を聖水で薄めたクリエッタ病の薬。

今まで体内に溜めていた魔力が、薬のせいで一気に流れているのだ。

エリシアは今１０歳。

１０年分の魔力が一気に解放された彼女には激しい痛みがくる。

子どもが耐えれるような痛みはないはずだ。

でも、私には見守る事しかできない。

自分の無力さを感じた。

急にエリシアの悲鳴が止まった。

そのまま気絶した彼女を、私は慌てて駆け寄って支えた。

何時の間にか魔法が解けて金髪に戻ったエリシアの髪が、さらりと私の腕を滑った。

2―5

エリシアはすぅすぅと寝息をたててていたため、死んではいないのだろう。

彼女をソファに下ろすと、私は部屋を見わたした。

エリシアの魔力が勢いよく溢れたお陰で、部屋の中はぐちゃぐちゃになっていた。
あちこちに本が投げだされ、硝子の破片があちこちに飛び、机上ではインクが盛大に零れている。

だが、こんなときも魔法があれば大丈夫。
魔法というのはイメージが大切だから、数時間前まで綺麗だった部屋を想像しながら瞬きをする。
すると、一瞬で部屋は元通りに。

この世界の人間は詠唱しなければ魔法は発動しないと信じこんでいるため毎回長ったらしい言葉を並べるが、実際はそんな事ないのだ。
まぁ、それ相応の魔力が必要になるのも確かだが、私には関係ない。

ふとエリシアの方を見て、起きたときに目が覚めるように柑橘系のジュースを用意しておこうと思い、キッチンに向かった。

―＊――――＊―

５時。
だんだん外が暗くなってきた。
やばい、６時までに城に帰せれるかな、と思いながらエリシアの髪を撫でていると、彼女の長いまつげがピクリと揺れた。
驚いて手を止めると、エリシアの目がゆっくりと開いた。
中から見えたエメラルドの瞳は、状況を掴めずに左右に動いている。
それを見たとき、私も今まで緊張していたのだろう、糸が切れたように涙を流し始めてガバリとエリシアに抱きついた。

「よかったぁぁ～」

エリシアはそんな私に戸惑っているようだった。

それから暫くそんな姿勢が続いたが、我に返った私が慌てて体を離した事で終わる。
すごく恥ずかしい。
私の黒歴史が一件追加された。

エリシアとは反対側のソファに座り、起き上がった彼女にジュースを飲むよう勧めた。

「さて、エリシア体は大丈夫？」

ジュースを一口飲んだ彼女に聞く。
エリシアは頷きながら答えた。

「うん、大丈夫」

「どこも痛くない？」

「うん、どこも……あれ？どこも痛くない。なんで？」

エリシアは不思議そうに自分の体を見る。
その様子だと、薬はちゃんと効いたみたいだ。
クリエッタ病の症状の１つに患者は常に体の何処かに痛みを感じる、
というものがある。
痛みを感じないという事は病気が治ったという事だ。

だが、それだと少しエリシアに言わなければならない事がある。

「エリシア、確か依頼の報酬は話し合いで決めるはずよね」

「うん」

「私は報酬を受け取らない代わりに、貴方に黙ってもらいたい事があるの」

私は人差し指を立てる。

「絶対に私の事を他人に話さないで」

言葉に力を入れたせいか、エリシアの肩が恐怖で揺れた。
そしてコクコクと何度も頷く。
…そんなに冷や汗流すほど怖かった？
軽くショックを受けた。

―＊―――――＊―

その日、王都での会話は１つの話題で埋め尽くされていた。
エリシア第一王女の病気が治った。
だが、何故治ったのかは分からないらしい。

ある人は言う。
魔の森にすむ不老不死の魔女が気まぐれに治したのだ。

それに他の人は言う。
いや、神竜様が治してくれたのだろう。

他にも王女が自力で治した、実は病気だった事は嘘だった、などいろいろあったが最終的に残ったのは、神様が治してくれた説である。
どこから広まったのかは分からないが、彼女の病気は神が治した、エリシア第一王女は神様に愛された子である。
そんな噂が幅広く、国外までにも広がった。
エリシアの魔力量が常人の数倍高い事もそれを手伝っているのだろう。

とにかく、今のガレストラではエリシア王女は聖女扱いされている。

2―6

２日間の休暇も明けた緑の日の正午ごろ。
私は用意していた昼食を食べ終えて、カウンターで本を読んでいた。
鈍色の情報本には、この本読みたいな、と思いながら開くと、その本の内容が一字一句違わずに書かれているという素晴らしい機能があるので、読もうと思えば誰かが綴ったラブレターまで読める優れものだ。
読んだ事はないけれど。

それはまぁいいとして、本を読んでいるときに客が来た。
眼鏡をかけ、品のある服装に身を包んだ中年の男。
その男の事を知っている私は、あの事だろうなぁ、と思いながらも笑顔で接客する。

「いらっしゃいませ」

「お久しぶりですねターミャ嬢。ところで本の修理を頼めますか？」

入ってくるなりそれはないだろう。
差し出された本を受け取って、その場でパラパラとめくる。
その行動に吃驚している様子の男は無視。
３３ページ目にはやはり紙と大金が挟んであり、紙には予想通りの内容。

『エリシア王女の病気が治った件について』

それを見て心の中で溜息をついて、本を閉じてそのまま男に返す。

「申し訳ありません。その件については私も全く分からないので」
「口封じでもされましたか？」
「なんの事でしょう？」
ニッコリ笑顔で対応。
間違っても、それは自分がしました、なんて言えるわけがない。
暫く見えない火花を散らした後、溜息（負けた）をついたのは相手の男。
「……では次はこれをお願いします。代金はその本の分でいいです」
次に渡されたのは『ティガー伯爵家の最近の動きについての情報』。
よし、諦めたか。
「かしこまりました。宰相さんも大変ですね」
そう、彼はこの国の宰相なのだ。
名前はロンド。
仕事に真面目だが愛妻家なのが有名で、最近は娘が嫁に行った件で一騒動あったそうだ。
なんでも婿の家は隣国ロシェンの王族なのに剣で切りつけようとしたとか。
彼等は恋愛結婚なため、それも笑って済まされたが政略結婚なら戦争ものだ。
結婚式の日は「小さい頃はパパと結婚すると言っていたのに」と泣きながら言っていたらしい。
「貴方が楽に情報を渡してくれれば少しは楽になるのですが」

「なんの事やら分かりませんね。はい、どうぞ」

会話中にも私は紙に情報をかいて本に挟みロンドに渡した。
勿論お金は回収済みだ。
受け取ったロンドはその中身を確かめた後、礼を言って店を出ていった。

「今日も賑やかだなぁ…」

ロンドが店の出入り口の扉を開けたときに漏れた街の騒音に、私は少し苦笑した。

閑話　2－前編（前書き）

エリシア視点で第2話です

閑話　2－前編

空を見ると心が安らぐ。

「エリシア様、薬はきちんと飲んでくださいね」

「分かってる」

そんな薬を飲んだって、いったい何になるというのだろう。
私の病気が過去に前例がなくら治す方法もかかる理由も分からない病気だという事は知っている。
親切（笑）な貴族がまわりくどい言い方で教えてくれたから。

「とうとう今日だわ」

今日の昼、待ちに待ったギルドからの御使いがくる。
私を外に出してくれる救世主たる人が。
今まで眺める事しかできなかった城下町に行く事ができるのだ。
無意識の内に口角をあげながら、また空を眺めた。

―＊――――＊―

時計の針は1時より少し前を差していた。
キョロキョロと周りを見渡すが、目印である銀のペンダントをつけた人はまだ来ない。

っていうか侵入できるのかな？
できなかったら依頼した意味がないけど、侵入されたらされたで城の警備が甘すぎよね。
だいたい常に人に監視されるなんて気持ち悪いだけなのに、護衛なんて1人で充分だわ！
なにが悲しくて何人もの人に監視されなきゃいけないのよ！
お兄様とお父様の過保護め！！

そう心の中で愚痴っていると、急に部屋の中に軽い音が響いた。

コンコン

吃驚して肩を震わせる。
急いで発生源のバルコニーに向くと、そこには…黒を纏った女神様がいた。
一瞬本気で思ったが、彼女の胸元で光を反射させて光るペンダントを見て、依頼を受けた人だと分かった。

女神をそこで待たせて、急いで秘密裏に入手した服に着替えて戻ると、ガバッと彼女に飛びついた。
あ、甘い香りがする～。
レオン兄様じゃなくて、こんなお姉様が欲しかったなぁ～。

「しっかり掴まっていて」

女神様の声は優しさに溢れた柔らかな声で、とても心地よかった。

それからは驚く事ばかりだった。

女神様…シーナが上級魔法使いでも難しいような無詠唱の移動魔法と幻覚魔法を使っていた事。
城下は人で溢れて活気がよく街を歩く人々の会話で騒がしかったが、静かな王城とは違い何もかも新鮮に感じられる。
そこで食べた物は城での味の薄い病人食とは違い、味が濃くてとても美味しかった。

そして私が一目惚れをした猫のしおり。
ダメもとで「欲しい」と強請ると、シーナは微笑みながらそれを買ってくれた。

嬉しくて嬉しくて、大切にしようと思いながら眺めていたら…

また、いつもの発作が起きて、

そこからの私の意識はない。

閑話　2－後編

王都では私の病気は神様が治した、私は聖女である。
みたいな噂が流れている。
多分あの宰相が王族のイメージアップのために流したんでしょうね。

「まぁ、間違ってはいないけど」

だって私の病気を治してくれたのは女神様のような方だもの。
少し怖いときもあるけど…。
あの時のシーナは怖かったなぁ、あのなんともいえない威圧感。
きっと王様モードの父様と同じかそれ以上の怖さね。

「暇ねぇ…」

最近は城内が騒がしい。
まぁ、原因は私ですけどね。

寝転んでいたベッドの横の台の上に置いていた本をとる。
これは私の大好きな作家であるノイズの新作恋愛小説だ。

バラリとめくると、開いたページの中央から銀色の猫が私に向かってエメラルドの瞳を向ける。
あの日に買ったしおりだ。

思わず顔がにやけてしまうのはシーナの事を思い出したから。
あぁ～、シーナがお姉様になったらいいのにな。
だったら毎日会うとこもできるのになぁ。
お兄様と結婚してくれたら美男美女でお似合いじゃないかしら。

でも、最近はレオン兄様にも好きな方ができたみたいですし。
本人バレてないの思っているのかしら。
お慕いしている令嬢はいないの？と聞いただけなのに、あんなに顔を真っ赤に…！
普段の仕事中のポーカーフェイスはどこへいったのかしらね。
いつもは貴族の方々に内心を悟られぬように『おーじさますまいる』を貼り付けているのに、たった一つの質問であの顔とは…。
本当に笑えますわ。

けとど、いったい誰なのかしら、お兄様の好きな方は。
ヴェルア侯爵の箱入り令嬢、カシア伯のクリス令嬢…それとも才色兼備な隣国の第三皇女様かしら？
みんな美しい方々ばかりですけど、やっぱり…。

はぁ…、シーナだったらいいんだけどなぁ…。

それにしてもシーナはいったい何者なのでしょうか。
魔法の才能もあり、私の病気を治す薬を所持して、それにあの凄まじい威圧感。
ただの冒険者とは思えませんわね。
あ、ギルドからの信頼もありそうですね…。

……まぁ、別に誰でもいいですね。
彼女が私の恩人である事には変わりません。

王都の空は今日も綺麗に晴れていた。

3　クッキーの日

まず生地を作って麺棒で平に４ミリくらいに伸ばしたら、それを型で抜いた後、魔法でキツネ色を目安に焼く。

「できた…！」

簡単クッキーのできあがり。

「わぁ、すごい。食べていい？」

「いいよ、店番のお礼ね」

今この世界は、日本でいうところの冬だ。
店の窓から雪が降る外の様子を見ているときに何の脈絡もなく、ふと思った。

ー甘いものが食べたいなぁ、と。

けれど店を無人にするわけにもいかないから、丁度よく店に来たアイリスにしばらくの店番を頼んだ。
クッキーはプレーンとチョコの２種類を２００個ほど作り、５分の１は自分用で残りは客に配る事にする。
５個ずつ袋に入れて可愛くラッピングして大きめの籠に乗せると、それをカウンターの横に置いた。
籠に白いリボンを結ぶと見栄えもいい。
うん、完璧。

「おいしい！」

隣ではアイリスがクッキーを頬張っている。
あぁ、こぼさないようにしてよ。
店内にはいつも浄化の魔法をかけているので少々こぼしても大丈夫なのだが、せっかく作ったクッキーがもったいない。
作った側としては最後のひと欠片まできちんと食べてほしいのだ。

カランコロン

「こんにちは」

しばらくすると学生服を着た客が来店する。
ここは武器の街なので本を買う人は少ない。
だから客の7割が学生だ。
幸いこの近くには大規模な学園があり、店は儲かっている方だと思う。
情報屋や、ギルドの依頼を受けたりもしているので尚更だ。
特に情報料が結構高いので、1日で2万ニア（だいたい２００万円）稼いだときは少し罪悪感を覚えた。
私は何も苦労してないのに、こんなに儲けて大丈夫なのか、と。
ちなみに、今でもその思考は抜けていない。

「これ買います」

さっき店に入ってきた学生が、2冊の本を持って私のいるカウンタ

ーに来た。
どちらも難しめの薬学の本である事から、彼女が薬師になりたい事が予想出来る。

学生からお金を受け取ると、それをポケットに入れるフリをしながら亜空間に仕舞い、本に刻まれている、勝手に本を店の外に持ち出されないための防犯術式を解除する。
そして、傍らの籠からクッキーの袋を1つ取り、本と一緒に彼女に渡した。

「当店をご利用してくださった方に今日だけ配っているんです。よかったらどうぞ」

ありがとう、と言いながら彼女はそれを受け取る。
どこの世界の人間も限定品には弱いらしく笑顔で去っていく女学生に、心の内で宣伝よろしくお願いしまーす、と呟いた。

この後の時間帯にいつもギルドでバイトをしている彼女は、おしゃべりな性格で有名だから。

3―2

しばらく経つと、予想通り『サクラ』にいつもより多い客が来始めた。
といっても、普段は客がいない事の方が多いので数人ほどだ。
主に冒険者風の客が多いので、先程の彼女が宣伝（おしゃべり）をしてくれたのだろう。
その中には知り合いも含まれていて、会話をしながら会計をすます。

「シーナはお菓子も作れるのね…。貴方に欠点はないのかしら？」

「ありますよ、マリア。ただ人前で見せないだけで」

今話しているのは黒髪赤眼の美少女。
やはり冒険者風の服装をしているが、どこか気品溢れる容姿と喋り方をしている。
それもそのはず、彼女はとある国の王族なのだ。

「でもシーナに欠点なんて想像もできないわ。ねぇ、兄様と結婚してくれない？」

「私が魔王と結婚なんて無理ですよ」

そう、魔王。
マリアは聖女みたいな名前をしているのに魔王の妹なのだ。
まぁ、マリアは偽名で本名はマリエーナ・ルトゥ・キャディスなのだが。

魔王は魔人の住む魔国の王の事。

魔人とは魔物を使って人々を襲うもの、と知られているが…そう思っているのは人間だけだ。
本当は魔人と魔物には何の繋がりもなく、魔国にも魔物の被害は出ている。
彼等には世界征服などの野望もないし無闇に人間に狙われるのも嫌なので、魔人のほとんどは魔国に引きこもっている状態だ。
だが、同じく引きこもり種族のエルフや竜人とは密かに交流があるようだ。

魔人の特徴は頭に生えた角である。
魔人にとって角は魔力を溜める場所だ。
その色はその人の魔力を表す色で、色が濃いほど魔力が強いそうだ。
そして取る事も可能らしいが、数ヶ月たつとまた生えてくるらしい。
魔人の多くは定期的に角を取り、もしものときのために保管している。

また人間と違い寿命も長いため、一見１０代に見えるマリアは実は５０代。
だが、これでもまだ若い方らしい。

「シーナなら大丈夫ですわ。それとも兄様の事が嫌いなんですの？」

マリアがお釣りを受け取りながら不満気に言う。
今回彼女が買ったのは『彼岸花』という、昔とある国で本当に起こったらしい後宮のドッロドロな話をかいた小説だ。
お買い上げありがとうございます。
それ、売れなくて困ってたんです。

「好きですけれど恋愛対象としてではないし、ハーブ様にはカチュア様がいますし」

「そうですわよね、カチュアもどうして兄様のお気持ちに気づかないのかしら？」

「あの方は鈍感ですからね～」

「……そうですわね」

あれ？

今すごい間が空いたな。

マリアは残念そうな顔をして、そのまま店を出て行った。

私はそれを不思議に思いながらも、ありがとうございましたー、と彼女の背中に呼びかけた。

3－2（後書き）

マリアのあの間は「それ貴方がいいますの？」の間です

3―3

次の日。
気まぐれで行った昨日限りのクッキーイベントも終わり、シーナはカウンターでのほほんとアフタヌーンティーを飲んでいた。

ちなみに、シーナはトリップした初日に店を手に入れたけれど客が来ない時間が多かったため、最初の半年は暇さえあれば情報本で貴族王族の事を調べていた。
日本には無かったため気になっためだ。
王家の成り立ち、貴族の本音、後宮の不倫話、国を巻き込んだ恋愛結婚…全てノンフィクションだから尚更おもしろい。
おまけとして貴族の嗜みや王宮侍女の紅茶の淹れ方までも覚えたので、シーナの淹れる紅茶はプロにも劣らない。

「シーナ！」

まったりしている最中に、彼女の名前を呼びながら入ってきたのは、金髪碧眼の王子様。
レディオン殿下もといレオンである。

「いらっしゃいませ」

レオンは走ってきたのか息を少し切らせていた。
額に汗が浮かんでいそうだが、今は冬なので逆に暖かそうに思える。
私も寒いときは何か運動しようかな。

「あぁ、久しぶり。ところでシーナ、ここは甘い香りがするね」

甘い香り？
クッキーの香りかな。
私は鼻が慣れてしまったから、もう分からないけれど。
「えぇ、昨日はお客様にクッキーを配りましたから、その香りでしょう」
「昨日だけかい？」
「クッキーの数の都合で1日しかできないんですよ」
なら多く作れば良かったのだが、正直めんどくさかった。
私はめんどくさがり屋でもあるのだ。
「そうか……」
残念そうに顔を俯かせるレオン。
そんなにクッキーが食べたかったのだろうか。
だが、皇太子なら王宮で最上級のものをいくらでも用意してもらえそうなのだが。
その後、レオンはいつも通りエリシアのために本を買った。
彼女の病気はもう治っているのだが、大事をとって後2週間は部屋を出れないらしい。
名前や立場を隠しながらも、妹の事を話すレオンはとても嬉しそうだった。
彼から本の代金を受け取ると、それをポケットにしまいながら亜空間に入れた。

そして代わりにラッピングされた袋を取り出す。

「これ、どうぞ」

差し出したのは昨日の手作りクッキー。

レオンは吃驚してそれを見る。

あ、ポケットとクッキーの大きさが合わない…。

どこから取り出したのか訝しがられないかな。

「実は常連さんのクッキーは残しておいたんですよ」

いつもご来店ありがとうございます、と言いながら彼にそれを手渡す。

レオンは何故か微かに震える手で受け取り（なんで！？）心ここにあらずといった風に呆然としたまま店を出て行った。

途中で事故に合わないかな…。

ってか、この国の未来大丈夫かな。

少し心配になった。

3－3（後書き）

「さて、レオンは今ごろシーナの所へ全力で走ってるかな～♪」
王城、皇太子の執務室でアイリスは楽しげに微笑んだ。

4　深夜のお茶会

夜空に輝く星が城の庭園を照らす。
私達は月明かりを頼りに深夜のお茶会を開いていた。

参加者は４人。

冒険者風の服装を身につけていながら、気品を漂わせて優雅に紅茶を飲む少女。
魔国の王族であるマリエーナ・ルトゥ・キャディス。

紫色の髪を緩く後ろで結わえて、オドオドとアメジストの双眸を揺らしながら肩を小さくして座る少女。
その口元からは先の尖った牙が覗く。
ヴァンパイアで現魔王の婚約者であり、未来の魔王妃のカチュア・グラシス・ディア・ベルガモット。

ケーキを食べる私。
説明は以下略。
異世界人のシーナ・ターミャ。

そして、一見真面目で優しそうな、黒髪でどことなくマリエーナにた雰囲気の、この中で唯一の男。
額には２本の漆黒の角が生えており、常に細められている目から血のような紅の瞳が見え隠れしている。
魔国の頂点に立つ魔王、ハーベルト・ルトゥノス・ベルガモット。

そんな魔国の人々が慕う３人とは、深夜たまにお茶会をしている。
切欠はマリアが兄（＝魔王様）を私に紹介した際に出した紅茶が気

に入られたからだ。
なので、このお茶会には毎回メイドがついておらず、紅茶は私が、お菓子は料理大好きなカチュアが担当している。
ちなみに今回はチョコレートケーキ。
ほろ苦い大人の味が口の中で広がり、それをまた紅茶が引き立ててなんとも言えない美味しさ。
あの可愛さといい料理の上手さといい、カチュアはそのままお持ち帰りしたいくらいの少女だ。

だが、本当にそんな事をするとカチュア溺愛なハーブ（ハーベルト、魔王様がお忍びで使う偽名）に殺されそうだ。
さらに彼女は見た目１０代後半だが実際は７２歳である。
魔族の年齢は見た目では判断できないのだ。

そう考えながらカチュア様をじっと見ていると、それに気づいた本人が頬を赤らめ、そしてハーブの方から殺気…とまではいかないが、鋭い睨みが飛んでくる。

見てただけなのに過保護すぎる。
確かカチュア様がまだ１歳にも満たない産まれたばかりの頃に一目惚れをして、すぐに婚約したらしい。
結果、ハーブはロリコンという事になりそうだけれど、例え老人になったとしても愛せるらしいので曰く『魂の相手（パートナー）』らしい。

その事を神様に話してみたら本当にそうらしいから吃驚だ。

まぁ、そんな事もあり今代魔王の１番の弱点は間違いなくカチュアだろう。
城中の皆がそれを知っているので、カチュア様を誘拐及び暗殺しようとする者は数多い。

だが悪意をもって彼女から半径５ｍ以内に侵入するとチョーカーが反応し、もれなく魔王様から直々に制裁が加えられる。
その場面を見た事があるのだが、私がこの制裁の内容を口にする事はきっとないだろう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4873y/

シーナの事情

2012年1月5日23時52分発行